

平成27年度「全国学力・学習状況調査」の結果 —分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

区名	城東区
学校名	大阪市立今福小学校
学校長名	木戸 安子

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成27年4月21日（火）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

大阪市教育局では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育局の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科も含め、総合的に子どもの学力向上を目指しています。学校の現状や取組の参考にしていただきたいと思います。

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準向上の観点から、児童の学力や学習状況を継続的に把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) 以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

- (1) 教科に関する調査（国語、算数、理科）
 - ・主として「知識」に関する問題（A問題）
 - ・主として「活用」に関する問題（B問題）
 - ※ 理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に出題
- (2) 質問紙調査
 - ・児童に対する調査
 - ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全生徒
- ・今福小学校では、第6学年 35名

平成27年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

国語Aの平均正答率が全国平均を下回った。問題の解答傾向では、必要な情報を読み取る正答率は高かったが、文法に関する正答率は低い傾向が見られた。国語Bでは、平均正答率が全国平均を上回った。問題の解答傾向としては、文や図を関連付けて考えたり、場面の变化を読み取るなどの正答率が高かった。算数Aでは、平均正答率が全国平均を下回った。計算については高い正答率がみられたが、図形に関する内容には課題が残った。算数Bでは、平均正答率が全国平均を5ポイント近く上回った。割合に関する問題や面積を求める問題の正答率は全国に比べ随分高い。ただし、無答率を減らすことは今後の課題である。理科では、児童質問紙においては、家庭での学習状況に課題があることがわかった。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕国語Aの案内から必要な情報を読み取る問題や、国語Bの図から読み取ったことをまとめる問題の正答率が高かった。これは文と図や資料を関連付け読み取ることができるようになってきたことがうかがえる。また、習熟度別少人数授業を進めることで、児童が自分の考えをまとめられるようになってきている。しかし、漢字の習得や文法などの理解が不十分であることが課題であり、理解を定着させるように指導の工夫をすることが必要である。

〔算数〕算数A・Bとも数と計算領域と量と測定領域において正答率が全国平均を大きく超えた。これは、習熟度別少人数授業の徹底を図ることで、児童の個々の課題の克服につなげることができたと考えられる。また、数量関係領域では、割合に関する設問の正答が全国平均を大きく上回った。そして、問題形式が記述式の設問において正答率が高いことから、数学的な思考が育ちつつある。しかし、図形領域の正答率は全国平均から7ポイントも下回っていることから、より操作的な活動を授業に取り入れることが必要と考えられる。

〔理科〕生命やエネルギーの領域に関する正答率は高かった。しかし、星座や月の動きなど地球に関する領域の正答率は全国平均を大きく下回った。これは、児童質問紙での観察を計画的に行ったり、観察したことから考察したりすることが苦手な児童が多いことと合致する。実験は好きだが考えることは苦手である児童に、実験・観察の予想をしたり、仮説を立てたりすることで検証する楽しさを味わえる授業展開をすすめることが必要である。

質問紙調査より

全国と比較して肯定的な回答が高い質問は徳育の面では「将来の夢を持っているか」「自分にはよいところがあるか」など自己肯定感をもっている児童が比較的多いことが分かった。知育では「授業で扱うノートには、学習の目標（めあて・ねらい）を書いていますか」「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出た時に役に立つと思いますか」などの質問に対する肯定的な回答が高かった。しかし、国語や理科に関する質問で「自分で考える」といった項目では肯定的な回答の割合が全国に比べ低い状況であった。また、テレビゲームや携帯電話、スマートフォンなどの所持率や使用率は全国に比べ高く課題がみられた。

今後の取組

〔国語〕現在、今福漢字検定として始業前の時間で漢字練習を進めている。この取り組みをより充実させる。国語の授業ではユニバーサルデザイン化を図り、「わかった」「できた」を児童が感じ取る展開を図る。読書に関しては、現在、蔵書の充実や図書ボランティアの読み聞かせなど、児童が本に親しめる環境づくりを推進している。蔵書管理を含めブックトークなどを取り入れながら児童の言語活動を推進したい。

〔算数〕3年生以上では習熟度別少人数授業を徹底して実施している。また、1・2年生では、TTでの授業形態をとり児童のつまづきを減らしている。現状の取り組みは今回の結果に表れており今後も推進していく。図形領域の理解定着には授業での操作活動が不可欠であることから、算数的活動を通して体験的に学習させたい。また、考えの違いを説明し解決するなど、話し合う活動を大切にしたい。

〔理科〕実験・観察において、児童から課題を見つけることができるようにする。そして、仮説や予想を立て、実験・観察を通して検証する一連の学習活動を推進する。また、デジタル教材など視聴覚機器を活用することで学習理解の定着を図るようにする。